



日本文学全集 19



倉田百三

愛と認識との出発 他

亀井勝一郎

愛の無常について 他



河出書房

日本文学全集 19 倉田百三
亀井勝一郎



© 1973

責任編集

武者小路実篤 川端康成
石坂洋次郎 山本健吉
瀬沼茂樹

昭和43年2月25日 初版発行
昭和48年6月20日 7版発行

著	者	倉田百三
発	行	者 亀井勝一郎
印	刷	者 中島隆平
装	幀	草刈龍平
		原 弘
印	刷	・中央精版印刷株式会社
製	本	・中央精版印刷株式会社

発行所 東京都千代田区 株式会社 河出書房新社
神田小川町三の六

電話東京(292)大代表 3711
振替口座 東京 10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします
定価はカバー・帯にあります

目次

倉田百三

愛と認識との出発……………五

青春の息の痕（抄）……………一七

亀井勝一郎

愛の無常について……………二七

私の宗教観……………三五

恋愛美学……………四〇

断想……………四九

年譜……………五九

文学入門……………五七

作家の横顔……………四九

倉田艶子……………四九

山本健吉……………四三

倉田百三

愛と認識との出発

この書を後れて来たる青年に贈る

兄弟よ、我れ爾曹なんじらに新しき誠いましめを書き贈るにあらず。すなわち初めより爾曹の有てる旧き誠なり。この旧き誠は初めより爾曹が開きしところの道なり。されど我が爾曹に書き贈るところはまた新しき誠なり。

——約翰ヨハネ第一書第二章より——

版を改むるに際して

この書は発行以来あまねく、人生と真理とを愛する青年層の人々に読まれて、数多くの版を重ね、今もなおあわただしい世相の動きにも、自己本然の真実の姿を失うまいとする、心深く、清き若き人々の間に読まれつつづけている。

私はその生命の春に目ざめて、人生の探究に出発したる首途にある青年達にはこの書が正しく、示唆に富める手引きとなり得るであろうことを今も信じている。私が持みを持つのは思想的內容そのものよりも人生に対する態度である。いかなる態度をもって生き行くべきか、その誠と熱と力とラディカルな自由性とは今の青年達に感染して決して間違いないであろう。この書はたとい思想的に未熟と誤謬とを含んでいる場合にも、純一ならぬ輕雜な何ものをもインフェクトせぬであろう。私は反語とか諷刺とかの片鱗をもつて論述を味わいつける、大家にも普通なレトリックさえ決して用いなかったのである。徹頭徹尾純一にして無雜な態度を守り得たことはこの書

が若き人々に広く読まれるに際しての私のひとつの安心である。小さく賢く、浅く鋭く、程よく世事なれる今日の悪弊から青年達を防ぐのに役立つでもあらう。

この書にはいわゆる唯物論的な思想は無い。一般的に言つて、社会性に対する考察が不足している。しかし生命に目ざめたる者はまず自己の享けたるいのちの宇宙的意義におどろくことから始めねばならぬ。認識と愛と共存者への連関とはそこに源を発する時にのみ不落の根基を持ち得るのである。社会共同態の觀念も我と汝と彼とをひとつの全体として、生を与うる絶対に帰一せしむる基礎なくしては支え難い。社会科学の前に生命の形而上学がなくてはならぬ。

この書を出版してよりすでに十五年を経ている。私の思想はその間に成長、推移し、生の歩みは深まり、人生の体験は多様となった。従つて今日この書に盛られているとおりの思想を持つてはいない。しかし私の人間と思想とのエレメントはいぜんとして変りない。そして「たましいの發展」を重視する私は永久に青年たちがそこを通過して来ることのぜひ必要なところの感じ方、考え方の経路を残しておきたいのである。けだし思想は生命が成長するために脱ぎ捨てて来なければならぬ殻皮である。しかしその殻皮を通らずに飛躍することは何人にもあたわぬ。青春時代には青春の被覆をまとうていねばなら

ぬ。生命と認識と恋と善とに驚き、求め悩むのは青春の特質でなくてはならぬ。社会性と処世との配慮はやや後れて来るべきものであり、それが青春の夢を喰いつくすことは惜しむべきである。世に属くことと天につくこととの間には聖書のしるす如く越え難い溝がある。まず天と生命とに関する思想と感情とに充ち充ちてその青春を生きよ。私が私の青春を回顧して悔いがないのはそのためである。やがて世はその乾燥と平凡と狼狽との塵勞をもって、求めずとも諸君に押し寄せるであらうからである。

「常に大思想をもって生き、瑣末の事柄を軽視する慣わしを持って」とカルル・ヒルティは言った。今の知識青年の社会的環境についての同情すべき諸条件を決して私は知らぬのではない。しかも私が依然としてこの語を推すのは、瑣末な処世の配慮が結局青春を蝕み、気魄を奪い、しかも物的にも、それらを軽視したよりもなんらよきものをもたらさぬであらうことを知るからである。今日の世に処して、物的欠乏の中に偉大なる精神を保つ覚悟なくしては、精神的仕事にも、社会革命にも従事することはできない。物乏しければこそ物にかかずらうのはつまらない。大燈の「肩あつて着ずという事なし」と言い、耶蘇の「これらのものは汝に加えられん」と言う、その覚悟をもって、その青春を天といのちと認識と愛と

倫理との、本質的に永遠なる思想・感情に没頭せよ。諸君の将来を偉大ならしむる源泉はいぜんとしてここにあるのである。

今日世間の塵勞の中に大乘の信を得て生き、国民運動の社会的実践に従いつつある私は、それにもかかわらず、諸君の青春に悔いなからしめんためにこのアドヴァイスを呈するものである。

青春は短い。寶石の如くにしてそれを惜しめ。俗卑と凡雑と低劣とのいやしくもこれに入り込むことを拒み、その想いを偉いならしめ、その夢を清からしめよ。夢見することを止めた時、その青春は終るのである。

(一九三六・一二・一〇)

序 文

この書に収むるところは自分が今日までに書いた感想及び論文のほとんど全部である。この書の出版は自分にとって二つの意味を持っている。一は自分の青春の記念碑としてであり、二は後れて来たる青春の心達への贈物としてである。自分は今自分の青年期を終えんとしつつある。しかして今や青春の「若さ」を葬^{ほう}つて、年齢に關わりなき「永遠の若さ」をもって生きゆかむことを今後の自分の志向となしている。自分は今自分の青春と別れを告げんと欲するに臨んで、実に無量の感慨に浸^{ひた}らずにはいられない。自分は自分の青春に対して限りなき愛惜を感じる。そして^{あつち}心^{こころ}地^ちをさえ抑える事ができない。自分の青春は実に真面目で純熟でかつ勇敢であつた。そして苦悩と試練とに充ちていた。そして自分は顧みてこれらの苦悩と試練との中から正しく生きゆく道を切り開いて、人間の靈魂のまさに赴^{おもむ}くべき方向に進みつつあることを感じる。そして自分は自分がその青春の、そのようにも烈しかった動乱の中に在って、自己の影を見失わないで、本道から外れないで来ることができたことを心から何者かの恵みと感じないではいられないのである。自分は今自分の青春を埋葬^{まいざう}して合掌^{がうしやう}し焼香^{やうかう}したい敬虔^{けいけん}な

心持でいる。そして自分が青春を終えるまでに自分が触れ合つて来た、自分を育てるに役立ってくれた——多少とも自分が傷つけているところの——人々に謝しその幸福を祈らないではいられない気がする。自分の青春は又実に多くの過失に富んでいたのである。自分は自分に後れて来たる青年が、自分の如く真摯^{しんしん}に、純熟に、勇敢に、若々しく、しかしながら自分の如く過失をつくることなく、従つて自分及び他人の運命を傷つけることなく、賢明にその青春を過さんことを心から祈らないではいられない。それらの過失は実に純なる「若さ」に伴うものではあるが、しかしそれは一生の運命の決定的契機をつくる程重大なるものであり、その過失の結果は実に永くして怖ろしいからである。現に自分はその過失の報いから今なお癒やさることを得ずして、不幸な境遇の中に生きてゐる。ただ自分はその境遇の中に祝福を見出だす道の暗示を——それは自分の青春そのものが示唆したのであるが——かすかながらも擲^なみ得ているために、今後の生活の希望を保つことができるのである。自分はそこに自分の過失を償^{つぐな}い、生かし、否むしろその過失によって一層完きものに近づく智慧を獲得することができたと思つてゐる。この書はその過程の記録である。自分はこの書が後れて来たる青年に対して有益であることを信じてないではいられない。それは自分の青春がすぐれて美し

く、完全であるからではなく、かえって多くの過失を具えているからである。そしてその過失が償われて——少くとも償う本道の上に立つて進みつつあるからである。

自分はこの書を後れて來たる青年に対して、今の自分が贈り得る最上の贈物であることを信じる。人がもし心を空しくしてこの書を初めより終りまで読むならば、きつと何ものかを得るであらう。そこには一個の若き靈魂が始めて目醒め、驚き、自己の前に置かれたるあらゆる生活の与件に對かつて、真直ぐに、公けに、熱誠に働き掛け、憧れ、疑い、又悦び、様々の體驗を経て、後に始めて愛と認識との指し示す本道に出でて進みゆき、ついにそれらの与件を支配する法則及びその法則の創造者に対する承認及び信順の意識の暗示に達するまでの、生の歩みの歴史がある。この集に収むる文章はその思索の成績において必ずしも非常にすぐれているとは言わないが、その文章の書かれた動機は、何れの一つもその表出の理由と衝動とに充ちていないものはない。そして一つのものから次ぎのものへと推移する過程には必然的な體驗の連結がある。その意味において真に靈魂の成長の記録である。人は初めのものより終りのものへと進むに従つて、次第にその思索と體驗とが深められ、その考え方は多様にかつ質実となり、初めには裁いたものをも赦し、斥けたものをも摂り、曖昧なる内容は明確となり、次第

に深く、大きく、かつ高くなり、その終りに近きものは、もはや「恵み」の意識の影の隠見する所にまで達せんとしつつあるのを見出だすであらう。その意味においては、人はむしろ自分をあまりに早く老いすぎるとなすかも知れないほどである。實際自分には壮年期と老年期と同時に來たような氣がしている。それは必ずしも自分が緻密なる思索に堪え得ざる頭腦の粗笨と潑刺たる體驗を支え得ざる身体の病弱とのためではなく、實に自分の如き運命を享けたる者、早き死を予感せる者が、彼岸と調和との思慕に急ぐのは必然かつ當然なることである。その意味において自分は「恋を失うた者の歩む道」より後のものは、壮年期以後の人に対して読まらることを適當でないとは思わない。もとよりこの書には、ことにその初めの頃のものに稚く、かつ若さに伴う衝氣と感傷とをかなりな程度まで含んでいる。しかしながら自分は自分の青春の思い出を保存するためにかなりの羞恥を忍んでそれをそのままに残しておいた。それらの衝氣と感傷とはそれが真摯にして本質的な稟性に裏附けられている時には、青春の一つの愛すべき特色をつくるものである。實際自分はそれらのものを全く欠ける青年を、青年として愛することは困難を感じる。又かなり目障りな外国語の使用等も學生としての氣分を保存するためにあえてそのままにしておいた。「生命の認識的努力」は幼稚で

あり、学術的には認識論の入門に過ぎないけれども、その頃の自分にとっては実に重要なものであり、この文章を書いた頃の尊い思い出を愛惜するためにどうしても割愛する気になれなかった。かつこの文章には一般の青年がその一生を哲学的思索に捧げない人といえども、必ず知っておかなければならない程度の、認識論の最も本質的に重要な部分を悉く含んでいるからである。そして自分が常に抱いている、中学の課程において、自然科学を教うる際に、認識論ことに唯心論的な認識論の入門を併せて教えなければならぬという意見の実施の代用として役立つことを信じるからである。実際自分は、中学の誤れる教授法によって授けられたる自然科学の知識の、實在の説明としての不当の——その正しき限界と範囲以上の——要求から解放せらるるまでに、どんなに不

必要な、しかも実に惨憺たる苦悩を経験したことだろう。自分はそのため青春の精力の半ば以上を費したと言ってもいい。この事たる、ただ中学において、自然科学の教師が、その知識が實在の説明として、ある一つの考え方であつて、唯一のものではなく、他に多くのしこうしてその中には例えば唯心論の如く、全然反対の考え方もあることを附加するだけの用意を持っていさえたなら、免かる、少くとも半減することができたのである。そして恐らく私のみでなく、ほとんどすべての青

年が同じ苦悩を経験するであらうと思わないではいられない。その意味において自分のこの稚き一文はかなりの効果ある役目を果たすであらうと思っている。またこの書にはかなりしばしば同一思想の反復あるいは前後矛盾せる文章を含んでいる。これはすなわち自分が同一の問題を繰返し、繰返し種々の立場より眺め、考え、究めんとせるため及び思索と体験の進むに従つて、前には否定したものをも振り容れ、あるいは前に肯定したものを否定するに至つたためである。思想が必然的連絡を保つて成長してゆく過程を痕づけるものとして、かかる反復と矛盾とは、避くべからざるものであるのみならず又その思索と体験の真摯なることを証するものであると思ふ。

この書は青年としてまさに考うべき重要な問題を悉く含んでいるといつてもいい。すなわち「善とは何ぞや」、「真理とは何ぞや」、「友情とは何ぞや」、「恋愛とは何ぞや」、「性欲とは何ぞや」、「信仰とは何ぞや」等の問題を、たとい決して解決し得てはいないまでも、これらに関する最も本質的な考え方を示している。しかして考え方はある意味において解決よりも重要なのである。一般に自分はこの書の学術的部分には持込みを持っていない。殊に「隣人としての愛」より後は、自分の興味は次第に哲学より離れ、随つて表現法も意識的に学術的用語

を避けて、直接に「ところ」に訴える如きものを選ぶに致った。自分がこの書において最も恃みをおいている点は、人間が当に人間として考うべき種々の重要な問題を提出し、それについての最も本質的な考え方を示し、かつ人間の「ところ」の種々なるムードについて、深く、遠く、かつ懐かしく語り得ていると信じる点にある。それらの心情の優しさに於いて、種々の尊き「徳」について語り得ていると信じる点にある。自分はこの書が読む人の心を善良に、素直に、誠実にかつ潤おいに富めるものとならしむるに少しでも役立つことを祈るものである。一個の人間がいかに生きているかは、善惡ともに、他の共に生けるものの指針となる。その意味においてこの書は、その青春の危険多き航路を終えたる水夫が、後れて來たる友船へ示す合図である。自分は彼らの舟行の安らかならんことを心より願う。しこうして自分もまた愛と認識との指す方向に航路を定め、長き舟行の後終に彼岸に達せんことを念願するものである。が、それは恵みの導きなくしては遂げらるるとは思えない。願わくば造りたるものの恵み、自分と及び、自分と共に造られたるものの上にゆたかならんことを。

(一九二一年一月十八日朝)

憧憬

——三之助の手紙——

哲学者は淋しい甲虫である。

故ゼームズ博士はこうおっしゃった。心憎くもいじらしき言葉ではないか。思えば博士は昨年の夏、チョコルアの別荘で忽然として長逝せられたのであった。博士の歩み給いし寂しき路を辿り行かんとする我が友よ、私はこの一句を口吟む時、髯の疎らかな眼の穏やかな博士の顔がまざまざと見え、例えば明るい——と言っても月の光で微白い園で、色を秘した黒い花の幽かなる香を嗅ぎながら、無量の哀調を聞く如く坐るに涙ぐまるるのである。しかしてこうして哀愁に包まれた時私が常になすが如くに、今日も君に書く気になったのだ。

その後生活状態には何の異りもない。ただ心だけは常に浮動している。何のことはない運動中枢を失った蛙の

如き有様だ。人生の愛着者には成りたくて堪らぬのだが、それには欠くべからざる根本信念がこの幾年眼を皿の如くにして探し廻つてゐるのにいまだ捕捉できない。といつて冷たい人生の傍観者に何で成れよう。この境に彷徨する私の胸には遣る瀬のない不安と寂愁とが絶えず襲うて来る。前者は白幕に映ずる幻燈絵の消え易きに感ずるおぼつかなさであり、後者は麻痺せし掌の握れど握れど手応えなきに覚ゆる淋しさである。時々こんな声が大なる権威を帯びて響き来ることがある。

「はかない人智で何を解こうとしているのだ。幾年かかれば解けるのだ。それを解決してからが前前の意義ある生活ならば、それは危いものだ、初めから意義ある生活を打算してかからぬ方が増しかも知れぬよ。疑惑の雲の中へ頭を突き込んで、やがては雲の一部分に消え化してしまふのであらう。」

一度は恐れ戦いてこの声にひれ伏した。が、倨傲な心はぬつと頭を擡げる。

「いくら苦しくても、意義が不明でも、雲の中へ消え込んでも、その原因は私の意志どおりやって来たからだ。世の中に思いどおりをやるほど好いことがあるものか。それに私はある女（真理）に恋慕してゐるのだ。なるほど対手の顔はまだ見ない。しかし彼の女はきつと美しい崇い顔を持つてゐるに違いない。まだ見ぬ恋の

楽しさを君は知るまい。私の恋が片思いに終るとは断言できない。今に彼の女は必ず私に靡くよ。白い雲の上で私を呼んでいる彼の女の優しい上品な声が聞えるような気がする。考えてもみ給え。互いに胸を打ち明けてからも面白からうが、打ち明けぬうちも捨て難いではないか。私はどうしても思い切る気はない。」

君、僕はこんなことを考えて沮喪する心を励ましているのだよ。いつもの話だがどうも我が校には話せる奴がいない。〇市の天地において僕は孤独の地位に立っている。

から騒ぎ騒ぐ弥次馬、安価なる信仰家、単純なる心の尊敬すべき凡骨、神経の鋭敏と官能のデリカシーとに鼻を刺す歯の浮くような文芸家はいるが、人生に対する透徹なる批判と、纏綿たる執着と、真摯なる態度とを持して真剣に人生の愛着者たらんと欲する人はない。例の癡癡の〇君とはただ文学上において話せるのみだ。彼は根本的思索には心が向っていない。彼は考えずしてただ味わおうとのみ努めている。彼の唯一の根底は生の刺激すなわち歓楽である。歓楽からただちに人生に入った彼の内的生活の過程を私は納得することができない。絹糸の如き繊細なる感受性は持ちながら、智識は荒縄の如く粗笨なる一部の文芸家によって、哲学者の神聖なる努力と豊富なる功績とが、いたずらに人生の傍観者なる悪名の裡に葬り去られんとするのは、憤慨すべき事実であ

る。我ら哲学の学徒より見れば、いまだかつて哲学者ほど人生に対して親切、熱烈、誠実なる者を知らぬのである。彼はライフを熱愛するの余り、これを抽象して常に眼前にぶら下げてゐる。あたかも芸術家が自己の作品に對する如き態度をもつて哲学者は自己のライフに面している。彼のロダンの大理石塊を前にしてまさに鑿を揮わんとして息を屏め眼を凝らすが如くに、ベルグソンは与えられたる「人性」を最高の傑作たらしめんがためにじっとライフを見詰めているのである。我らは彼の蒼白き頬と広き額と結べる唇とに纏綿たる執着と、深奥なる智性と、強烈なる意欲の影の漂えるのを看過してはならない。フィロソファーとは愛智者という語義だという。しかし私は愛生者をこそ哲学者と呼びたい。

それから君は動もすれば單純なる心の持主、いわゆる善人をば輕蔑せんとする傾向があるがそれは悪いよ。考えてもみ給え。もともと我らは真正の善人——哲学的善人たらんがために哲学に志したのではないか。我らが冷たい思索の世界に、こうして凡俗の知らぬ苦勞を嘗めてゐるのは「真」のためでなく、「美」のためでなく、実に「善」のためである。「實在」に對する懷疑よりも遙かに疾く、遙かに切実に「善」に對する懷疑に陥つたのであった。迷ひ惑う我らの前に、いかに莊麗に、崇高に、嚴然として、哲学の門は聳えたりしよ。我らは血眼